



NEWSLETTER

～ 水を守り 湖を救う ～

アイレック
公益財団法人 国際湖沼環境委員会 (ILEC)
本ニュースレターには、英語版もございます。

第16回世界湖沼会議： たくさんのご参加ありがとうございました！

2016年11月7日、雨季に差し掛かったバリ島西海岸のクタにて、第16回世界湖沼会議(WLC16)が開幕しました。まず特筆すべきは、子どもたちの活躍です。本会議のサイドイベントとして企画された日本とインドネシアの小・中学生の国際交流(関連記事：本紙P.4)に参加した滋賀県のびわっこ大使と京都で環境保全活動に携わる小学生高学年10名、そしてインドネシア全国19の環境教育優先指定校から選抜された22名の中学生が開会式に駆けつけ、湖沼保全のために何が必要か、世界に向けたメッセージを発信しました。



バリの伝統舞踊や音楽の演出も交えたセレモニーは盛大に進行し、インドネシアのシティ・ヌルバヤ環境林業大臣や浜中裕徳ILEC理事長をはじめとする主催代表者が開会の辞を述べました。いずれにおいても、東南アジア初となる世界湖沼会議が湖沼大国インドネシアでの開催を迎えたことの意義に言及があり、会議成果への期待が込められたメッセージが発せられました。

本紙バックナンバーでも特集しましたが、横長の国土に島々が集まるインドネシアでは、地方によって宗教や文化も多様です。そこに散らばる1,500以上の湖沼が、こうした多民族国家の産業や生活を支える水源となっています。スマトラ島のトバ湖のような雄大な自然の中に佇む湖から、首都ジャカルタのスラム街付近にある都市湖沼など、形状や特徴はさまざまですが、おおよそどの湖も洪水や人口増加、経済急成長などの影響を受けて環境が脅かされています。こうした状況を何とかしようと、2009年よりインドネシアは湖とその流域の環境を守るための国策を打ち出し、その知恵と展開を共有する場として今回のWLC主催に手を上げました。その後4年以上の紆余曲折を経て実現した本会議は同国政府と各国関係者の尽力もあり、昨今のWLC開催回においては最多の1,000人以上を動員し、湖の保全をめぐる知恵と経験が世界各国から集結しました。

アジア随一の湖沼大国に 世界中から仲間が集まり、 話し合いました



閉会式までの4日間にわたり、200篇以上の論文を集めた分科会、フォーラム、サイドイベント等がさまざまなテーマのもとで開催され、WLCの特徴でもある多様な参加者層、つまりは学術・研究者、政府・行政機関、民間・市民団体等が一堂に会し白熱の議論を繰り広げました。本号では会議のハイライトを3ページにわたりお伝えいたします。それではWLC16特集号、お楽しみください。

今号の トピック

- 第16回世界湖沼会議：たくさんのご参加ありがとうございました！
- 元JICA研修員からの便り（中国）
- 国家政策対話：日本とインドネシアの湖沼政策交流
- 2016年度 さくらサイエンスプラン交流事業
- 県民等参加者のご活躍
- 科学委員からのメッセージ（日本）
- 国際政策フォーラム：アジア湖沼の連携促進に向けて
- バリ島での科学委員会総会と新役員の決定
- 各国からのILEC招聘者も分科会にて発表
- ILECの活動概要（2016年度）
- 閉幕：バリ宣言と次回霞ヶ浦へ
- ケニアにてILBM国際シンポジウムを開催
- 次世代につなぐ“びわっこ大使”
- ILEC設立30周年記念特別企画展示

国家政策対話：日本とインドネシアの湖沼政策交流

毎回のWLCの目玉となるプログラムのひとつに、政策対話があります。慣例の国際政策フォーラム(次頁)に先駆け、今回はWLC16開催国インドネシアと、琵琶湖を筆頭に湖沼の管理政策が進む日本の2国間の政策決定者、住民団体、研究者、企業関係者等の意見交換の場として「国家政策対話」が2日間2部構成で開かれました。11月8日午後の第1部：「政策改善」では、主に両国の政府・行政関係者がスピーカーとして参加しました。日本からは環境省水・大気環境局の渡辺康正水環境課長と滋賀県琵琶湖環境部の小松直樹技監より、国と滋賀県の湖沼流域政策



に関する発表がありました。対してインドネシアからは、地方政府が国とタイアップし制度整備を進めることを望む趣旨の発言や発表が目立ちました。翌日9日午前には第2部：「コミュニティ参加」が開催され、インドネシア全国から集まった民間企業や市民団体の代表者が各々の取組や国への提言を発表しました。日本の経験から学びたいとのインドネシア側からの声に応え、琵琶湖の事例としてまずILECの市木繁和事務局長が県行政の住民参加における取組を、次いで認定NPO法人びわこ豊穰の郷の寺田守理事が流域の市民モニタリングや守山市に生息するゲンジボタルの保全について流ちょうなバハサ語でそれぞれ発表しました。また、一般社団法人霞ヶ浦市民協会の沼澤篤主任研究員が、霞ヶ浦の市民モニタリングや水質改善活動について紹介しました。各発表に対しては会場の出席者から積極的な意見や質問が寄せられ、大変白熱した2日間となりました。この対話をきっかけに、両国の湖沼保全活動における交流が発展するとともに、インドネシアにおいては湖沼問題に対するしかるべき制度整備と利害関係者の参画が進むことを望みます。

県民等参加者のご活躍

WLC16では、次回WLC17開催地の茨城県をはじめ日本の市民団体から多くの参加がありました。ILECの地元滋賀県からは以下表の4団体が琵琶湖を取り巻く滋賀で培われた取組を発表しました。今回の会議では、大学生団体であるIVUSAをはじめ、若い世代の発表が目立ちました。各団体は会議に先立つ2016年10月、相互の事前交流も踏まえ、ILECに滞在中のJICA外国人研修員を前に口頭発表のリハーサルを行い内容を手直しする等、事前の準備にも力を入れました。そして迎えた会議本番、高島市針江地区における地下水利用について発表した針江生水の郷に対しては水質悪化に悩む参加者から、多様な利害

関係者の参画によるオオバナミズキンバイの駆除に取り組むびわこ豊穰の郷には、同じく外来の水草問題に苦勞する参加者からの質問がそれぞれ寄せられました。また、インドネシアのダム湖にてウナギの稚魚を遡上させる活動をしている参加者からの質問を受けたせせらぎの郷は、同様の取組を行う仲間に地元野洲市須原で収穫された「魚のゆりかご水田米」を贈呈、IVUSAはポスター・セッションにも参加し熱心な質疑応答を繰り返すなど、さまざまな交流がありました。参加団体の皆さんは他国の市民団体による発表も聴講され、それ

ぞれの活動への刺激となられたことでしょう。今後、会議で生まれた他国からの参加者との交流をぜひとも継続していただきますとともに、ますますのご活躍を期待申し上げます。



参加市民団体等一覧

団体名	発表タイトル
針江生水の郷委員会	カバタ
びわこ豊穰の郷	赤野井湾におけるオオバナミズキンバイの脅威
せせらぎの郷【初参加】	魚のゆりかご水田プロジェクト
国際ボランティア学生協会 (IVUSA)【初参加】	琵琶湖における外来種除去への全国的な大学生間連携

国際政策フォーラム：アジア湖沼の連携促進に向けて

本フォーラムの目的は、アジア、とりわけ東南アジアの湖沼をめぐる流域政策、科学技術研究、利害関係者の幅広い参加などをめぐり、各国や国際機関の連携を促進するプラット



フォームの構築を加速することでした。準備段階ではアジア地域のILEC科学委員会とインドネシア政府が協議を重ね、多くの国々や国際機関の賛同と参加を得ることができました。参加者はインドネシア政府、インド政府、マレーシア政府、アジア開発銀行(ADB)、国連環境計画(UNEP)より具体的な事例と連携推進の実情に関する報告を受け、A)国家政策とその実施計画、B)人材育成と能力開発、C)利害関係者の参加、D)熱帯域湖沼学をめぐる研究推

進、そしてE)地球規模の湖沼流域問題の5つのテーマに分かれて議論を行いました。ここでの多岐にわたる議論は、熱帯陸水システムのデータベース整備、湖沼流域管理の知識と経験の共有を目的とする国際的ネットワークの構築、更には湖沼をめぐる持続可能な開発目標(SDGs)の達成に向けたアジア地域での国際協力推進等の提言として「バリ宣言」に盛り込まれ、WLC17に向けた本格的なアクションが求められることになりました。

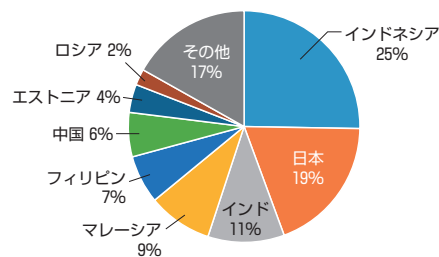
各国からのILEC招聘者も分科会にて発表

3日間にわたり開かれたWLC16の分科会では、31か国より170名以上が11のテーマ毎に発表を行いました。うち、地元インドネシアはじめアジアからの発表が3/4を占めましたが、世界各国からの多様な事例発表にさまざまな質問や意見が飛び交いました。

ILECの招聘者たちもグローバルな視点、または北・中・南米、アフリカ、アジアの湖沼(問題)の各特色を踏まえILBMの概念に沿った具体的なア

クションについて発表しました。ディスカッションでは若者たちから「境界設定の条件は何にするべきか」、「気候変動の影響をクローズアップするにはどのような指標に着目しておくべきか」等の質問が寄せられ、各発表者は丁寧に対応していました。国境と世代を超え、国際交流の場として分科会は多くの貢献をしたものと思います。世界中の湖沼とその流域の課題と取組が共有されることで、より効

国別発表の割合



率的で有効な活動を展開することが可能になると思われた3日間でした。



閉幕：バリ宣言と次回霞ヶ浦へ

連日、白熱の議論が繰り広げられたWLC16は、延べ35か国から1,070名を集め、2016年11月10日、翌日にバリ



島内を回るオープンツアーを残して閉幕いたしました。当日午後の閉会式では、会議のハイライトとなるバリ宣言の草案がILEC中村正久副理事長より発表され、ここで寄せられた出席者からの意見を反映した宣言は、11月15日付でインドネシア政府により採択されました。次いで2018年10月15～19日に次回WLCを主催する茨城県の橋本昌知事よりWLC17開催宣言が行われ、ILEC

浜中裕徳理事長による参加者・関係者への謝辞を込めた閉会の辞へと続きました。最後に、2012年に本国でのWLC誘致に最初に手を上げたインドネシア科学院(LIPI)を代表し、ザイナル・アリフィン地球科学副部長が式典を締めくくりました。LIPIはじめ多くの関係者にお力添えをいただきWLC16を成功裏に閉幕できましたこと、ここに改めて御礼申し上げます。そして2年後、またたくさんの湖沼保全に携わる皆さまとお会いできますことを楽しみにしております。

次世代につなぐ“びわっこ大使”

滋賀県は環境保全の持続的な推進のために、湖国の未来を担う子どもたちを育成する「ラムサールびわっこ大使事業」を平成20年度より実施しています。ILECでは、平成27年度より本事業を受託実施しています。昨年は「体験を通じて湖魚食文化について学ぶ」をテーマとして、国内での事前学習や、タイ王国チェンマイへの派遣を通じて国際交流を行いました。本年度は「稲作での水利用と水田の生き物たち」というテーマで、WLC16開催地のバリ島での国際交流に備えた国内での学習を進めました。

第1回事前学習会（6月18日）：

野洲市にある須原せせらぎの郷の



「魚のゆりかご水田観察会」に参加し、水田が育む生き物について学習しました。主に琵琶湖の固有種であるニゴロブナにとって、水路と水田との高低差が少なく琵琶湖と水田とを往来できることが必要であることを学びました。

第2回事前学習会（7月27日）：

彦根市の水産試験場を訪問し、琵琶湖の漁業について学ぶなか、西の湖で放流したニゴロブナの多くが放流場所に戻って産卵しているという調査結果を知りました。さらに湖北野鳥センターでは、琵琶湖と周辺の湿地に生息する生き物を観察しました。

その後、別会場にて鮒ずし漬けを体験しました。完成は2017年3月。みんな試食を楽しみにしています。



第3回事前学習会（10月2日）：

安土町商工会の西の湖和船に乗り、琵琶湖と周辺水辺とをつなぐ内湖やヨシ原の役割について、地元で長年活動を続ける奥田修三さんから話を聞きました。西の湖見学後、ILEC事務所に集合し、11月に控えた国際交流で発表する資料の準備と、発表練習を行いました。JICA外国人研修員の皆さんにも練習を聞いてもらい、わかりやすい発表をするための貴重なアドバイスをいただきました。



世界湖沼会議子ども交流事業：ILECは、ウダヤナ大学の協力と国際交流基金アジアセンターの助成を得て、琵琶湖淀川水系において環境活動を行う団体の子どもたちを対象とした「第16回世界湖沼会議子ども交流事業」を実施しました。これに、びわっこ大使国際交流事業と合同でバリ島に10名の子どもたちを派遣しました。

第1日目(11月6日)：ウダヤナ大学を訪問し、バリの文化や環境問題、スバックと呼ばれる水管理システムに基づいた稲作を学びました。午後は、バリ随一のケドンガン魚市場を見学した後、スバセング（スバック）を訪問し、大学の生物学科のスタッフと一緒に生き物観察を行いました。日本では見られない生き物に子どもたちも興味津々！



第2日目(11月7日)：デンパサール市北部にあるペグヤンアン第一小学校を訪問し、環境・観光クラブに所属する約50名の4～6年生と交流しました。日本でしっかり練習してきた発表も無事終了し、インドネシアの学校でもごみの分別回収等に取り組んでいることを学びました。

湖沼や河川の宝をたくさん見つけよう。
そして、湖沼や河川の大切さを
もっと伝えよう！



第3日目(11月8日)：盛大なWLC16開会式の冒頭で「子ども宣言」の大役を終え、会場は拍手喝采。午後はインドネシア全土から集まった22名の中学生と一緒に湖沼の環境に関する教育ゲームを楽しみました。

熱帯雨季特有の高い湿度は慣れるのに大変でしたが、参加した子どもたちには国内ではできない体験を通して大きく成長するきっかけになったと思われま。帰国してからの今後の活躍に期待しています。

元JICA研修員からの便り

岳宣鋒 (中国)

今回は、2012年度のJICA研修「水環境を主題とする環境教育コース」に中国より参加された岳宣鋒さんからの便りを紹介します。岳さんは研修当時から陝西師範大学化学技術研究所で准教授として勤務しておられます。環境分析等に従事されていた当時、低炭素社会実現という中国の国家的要請に応えるために研修を受けられました。その2ヶ月間、日本では環境意識が広く普及していることやゴミの分別が徹底していることに強い印象を受け、水の大切さを訴え、人類の持続可能な発展に向けた廃棄物処理の必要性を感じたとのこと。帰国後しばらくし、いろいろなサンプルの分析的発見技術に関わられたのち、現在は「薬品開発に関する新たな方法と実践」に取り組んでおられます。これについて寄稿いただきましたので以下にご紹介します。



飲料水の水質を扱う岳さん(左端)と研究グループ

ここ10年で科学者の間だけでなく、一般的にも環境生態系や薬剤投与、その他に起因する人間の健康問題は大変注目を集めるようになりました。現在、私は薬品発見に関する新技術の研究とその適用に携わっており、そのことについて簡単にお話します。中国の伝統的な薬品である漢方薬から、その化学的特性や生物活性、毒性を調べる前にまず調合物を分離、精製することは一般的に行われています。使用可能となったもののみ、更なる動物実験や持続性評価の研究対象となります。



息子さんと共に陝西省の宜君川にて浮遊植物を観察

他方、薬用植物からの天然調合物の抽出は大変重要である点は云うまでもありませんが、こうした抽出は、漢方薬の管理と研究の原理に基づいて行われていないケースが多々あります。漢方薬とその調合手法による治療効果は、複数のターゲットに対する複数の調合による相乗効果であると考えられています。このため、我々は漢方薬の調合とその手法を、個々の効能ではなく全体として見なすこと、即ち、単なる調合についてののみではなく、漢方薬管理の経験則に基づいて研究すべきであると考えています。我々の研究では、ガスクロマトグラフ質量分析計(GCMS)、液体クロマトグラフ質量分析計(LCMS)と、ヒト臍帯静脈内皮細胞(HUVEC)における活発なレセプターへの特別な親和性を活用し、潜在的腫瘍血管形成抑制剤(TAI)を抽出するための、漢方薬からの活性化化合物抽出のモデルを複数確立しました。それらは漢方薬抽出方法活用の一環として、中国の薬用植物である川芎からのエッセンシャル・オイルやアルコール抽出(中国の薬用植物トリカブトからの抽出等)に適用されています。

2016年度さくらサイエンスプラン交流事業

2016年12月5日から14日の10日間、昨年度に引き続き国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)からの助成を得て、「日本・アジア青少年サイエンス交流事業」(さくらサイエンスプラン交流事業)を実施しました。今回も中国・湖南省にある湖南師範大学、同大学付属小中学校より教師、学生等8名を招聘し、琵琶湖を擁する滋賀県で実践する環境教育や科学技術について学んでもらいました。訪問した県内の小学校では、地域の食について調べ発表する総合学習の授業を視察。「鮒ずし」など滋賀県特有の食について、小学生が発表。招聘者からは「火宮殿臭豆腐」という湖南省の伝統料理の紹介がありました。互いに発酵食品で臭いは独特ですが、美味しいという共通点を見つけ納得し合

う場面も。今回の交流が、湖南省における科学技術や環境教育の更なる発展につながることを願っています。



Asian Core Programによる日本とマレーシアの共同研究・教育活動

京都大学大学院工学研究科附属流域圏総合環境質研究センター
教授 清水 芳久



京都大学では、2010年1月にマレーシアのマラヤ大学に「京都大学-マラヤ大学マレーシア共同教育研究センター」を開設しました。そして、このセンターをAsian Core Program「リスク評価に基づくアジア型統合的流域管理」のための研究教育拠点に位置付け、日本とマレーシアの主たる大学が共同で教育・研究を実施しています。アジアでは現在、急速な経済発展のためさまざまな環境問題が噴出していると同時に、社会基盤の発展だけでなくその環境整備に努力する経済的余裕も生まれつつあり、これは日本がこの数十年において対応してきたことを極めて短期間で経験・対応しようとするものです。特に流域管理・リスク管理という点においては、アジア諸国はまだ整備が遅れており、人の衛生的環境の確保が不十分である地域が多くあります。

Asian Core Programは、これまで多くの水環境問題を解決し、リスク評価・流域管理システムを構築してきた日本の知識をマレーシアの研究者・実務者と共有するとともに、日本では経験できない異なる気候・文化圏での問題を対象として情報共有し共同研究を実施することで、新たに発生することが予測される重要な課題に対しての解決策を見い出そうとするものです。両国の研究者・実務者の交流等を通じて、アジア型の「リスク評価に基づく統合的流域管理 (Risk Based Integrated Watershed Management)」の学問としての体系化を図り、新しい研究者・技術者育成のための教育プログラムを作成し、育成した若手を次世代の指導者とすることで、継続的な研究・人材育成が可能なりソースを築くことも目標とします。

また、JSPS-VCC (日本学術振興会-マレーシア副学長会議)による拠点大学交流事業(平成12年度~21年度)で培ったネットワークを活かし、これをより発展させるために特に流域管理と化学物質リスク評価に注目し、アジアの気候特性、生活形態、文化などに重点をおいて流域における課題を洗い出し、水文(グループ1)、水質(グループ2)、有害化学物質リスク(グループ3)およびガバナンス(グループ4)をめぐる評価方法・知識ベースを構築するとともに、地球温暖化に伴う異常気象にも耐えうる衛生的流域環境の実現を目指しています。将来的には、このAsian Core Programが先駆的な成功モデルとなり、熱帯や半乾燥地帯・乾燥地帯にある東南・東アジア各国での「リスク評価に基づく統合的流域管理」の重要性認識が高まり、拡張することが可能な拠点形成を目標としています。



マレーシアでのシンポジウム (2012年)

バリ島での科学委員会総会と新役員決定

バリ島でのWLC16開会式を翌日に控えた2016年11月7日、ILEC科学委員会の総会を開催いたしました。当委員会は、湖沼流域管理とその保護の分野において世界的に著名な各国の研究者や行政官等で構成され、当財団の活動を支援し助言を与え、プロジェクト実施において中心的役割を果たしています。メンバーは一任期である3年毎に編成され、委員長、2名以下の副委員長、3名以下の役員が置かれます。今年4月より就任したウォルター・ラスト委員長(写真中央左)のもと始動した第12期の委員会としては初めての顔合わせとなり、今後の財団の運営方針と委員会の活動戦略について終日に渡り協議をいたしました。また、新たに副委員長としてアデリーナ・サントスボルハ委員(写真中央右)およびサリフ・ディオップ委員(右から3人目)が、また役員としてサンドラ・アゼヴェド委員(右から

2人目)がそれぞれ選出されました。ILECはこれまで開発途上国支援においてはアフリカおよびアジア地域を重点的に活動してまいりましたが、今後は中南米を視野に入れるべく、この地域を拠点とする委員の活躍が期待されます。



バリ島での総会開催後の集合写真
(左から3人目は前期まで委員長を務めたILEC中村正久副理事長)

第12期ILEC科学委員会のメンバーリストは当財団ホームページに掲載しております：
www.ilec.or.jp/about_ilec/scicom

ILECの活動概要 (2016年度)

- 4月 11～22日 グリーン成長に資するハロン湾支援プロジェクトに参加 (クアンニン省)
20日 WLC16第1回国内連絡調整委員会を開催 (大津市)
- 21・22日 WLC16準備協議のためインドネシア環境林業省使節が環境省、JICA本部、滋賀県庁、およびILECを訪問 (東京都・大津市・草津市)
- 22～28日 JICA委託「クアンニン省ハロン湾地域グリーン成長推進に係る本邦招聘事業」を実施
- 5月 9～11日 IWC8にてTWAP湖沼グループの評価結果を発表 (コロンボ) **【写真①】**
10日 関西アーバン銀行よりeco定期預金の寄付として、139万円を拝受 (大津市) **【写真②】**
15日～ グリーン成長に資するハロン湾支援プロジェクトに参加 (クアンニン省、6/1迄)
- 6月 1～5日 インドネシア政府とのWLC16準備会合および同国都市湖沼視察の実施 (ジャカルタ・チビノン)
7～10日 第1回フィリピン淡水生物多様性と生態系シンポジウムに出席 (マニラ)
17日 米国イリノイカレッジの学生と教員等11名がILECを訪問 (草津市) **【写真③】**
18日 ラムサールびわっこ大使第1回事前学習会を開催 (野洲市)
22日 WLC17第2回企画準備委員会に出席 (つくば市)
- 7月 15日 上海の同済大学環境科学工学院の学生、教授等29名がILECを訪問 (草津市)
27日 ラムサールびわっこ大使第2回事前学習会を開催 (彦根市、長浜市)
- 8月 1～5日 ケニア・ナクル政府関係者が滋賀県の廃棄物処理施設および環境事業者等を視察 (大津市・草津市・甲賀市・高島市) **【写真④】**
3日 ラムサールびわっこ大使交流事業 (生物多様性フォーラム) を実施 (草津市)
8日 UNEPと5年間の共同事業実施に関する覚書を更新締結
8日 WLC17第3回企画準備委員会に出席 (つくば市)
17～18日 カンボジア・トンレサップ湖へのILBM導入に関する研修の実施 (草津市)
19日 JICA委託研修第1回「統合的流域管理による水資源の持続可能な利用と保全」が開講 (10/14迄) **【写真⑤】**
27～28日 TICAD6公式サイドイベントとしてILBM国際シンポジウムを開催 (ナイロビ)
- 9月 12～16日 インドネシア政府とのWLC16準備会合を開催 (ジャカルタ)
26日 滋賀県立守山高等学校の生徒、教師9名がILECを訪問し、JICA研修員と交流 (草津市)
- 10月 2日 ラムサールびわっこ大使第3回事前学習会を開催 (近江八幡市・草津市)
8日 WLC16参加の滋賀県民団体等がILECにて発表を予行 (草津市)
18日 WLC16第2回国内連絡調整委員会を開催 (大津市)
- 11月 5～9日 WLC16子ども交流事業を実施 (バリ島)
6日 滋賀大学とLAKESIIIワークショップを共催 (バリ島)
7日 科学委員会総会を開催 (バリ島)
7～11日 第16回世界湖沼会議 (WLC16) を開催 (バリ島)
28日～ グリーン成長に資するハロン湾支援プロジェクトに参加 (クアンニン省、12/10迄) **【写真⑥】**
- 12月 5～14日 日本・アジア青少年サイエンス交流事業を実施 (大津市・草津市)
26日 WLC17第4回企画準備委員会に出席 (つくば市)



2017年

- 2月 4日 ラムサールびわっこ大使が近畿子ども水辺交流会に参加 (神戸市)
8日 WLC16報告会を滋賀県と共催 (大津市)
10日 WLC17第5回企画準備委員会に出席 (つくば市)
15日～ グリーン成長に資するハロン湾支援プロジェクトに参加 (クアンニン省、3/9迄)
- 3月 4日 ILEC設立30周年記念特別企画展示「湖と生きる－琵琶湖から世界へ 未来へ！－」が琵琶湖博物館にて開幕 (草津市、4/9迄)
11日 ラムサールびわっこ大使事業報告会を開催 (草津市)

ILBM: 統合的湖沼流域管理
IWC8: 第8回国際水会議

JICA: 国際協力機構
TICAD6: 第6回アフリカ開発会議

TWAP: 越境水域評価プログラム
UNEP: 国連環境計画

WLC16: 第16回世界湖沼会議
WLC17: 第17回世界湖沼会議

ケニアにてILBM国際シンポジウムを開催 ～アフリカの次期活動に向けて～

ILECは2016年8月27日から28日にかけて、第6回アフリカ開発会議(TICAD 6)の公式サイドイベントとして国際シンポジウムおよびワークショップをナイロビにて開催しました。これは、アフリカにおけるILBMを促進することを目的に国際連合環境計画(UNEP)、外務省、環境再生保全機構、滋賀大学環境総合研究センターの後援を得て実施したものです。シンポジウムではジャクリーン・マグレイド氏(UNEP早期警報環境アセスメント局長)とリチャード・キプサング氏(ナクル政府行政官)の開会挨拶に続き、以下の講演が行われました。

1. 国連淡水プログラムの2012-2016実行戦略 (UNEPエリック・ホア博士)
2. ケニア湖沼管理における国家政府指針 (ケニア水灌漑省 フィリップ・ムラグリ氏)
3. ILBMと生態系サービス共有価値アセスメント (ESSVA) (ILEC 中村正久副理事長)

ディスカッションでは湖沼環境データベースや統合的水資源管理(IWRM)に加えてのILBMの必要性が議論されました。2日目の



ワークショップでは、2015年から実施したケニア3湖沼調査の結果と解釈から生態系認識プロファイル(ESPP)の有効性を参加者と共有しました。各報告にて取組が共有された後に「どのようにしてケニアの持続可能な湖沼管理戦略にILBMを入れ込むか」という議題のパネルディスカッションが行われ、以下について合意しました。

1. ILBM-ESSVAの実施ロードマップと明確なコミュニケーション戦略を基に、ケニアの湖沼流域管理戦略を開発する。
2. 政府による「グリーン・エコノミー戦略計画モデル」への採択を目指し、我々の戦略計画を提出する。
3. ILBM湖沼概要書(Lake Brief)は定期的に更新すべきである。
4. 各湖沼流域は独自の属性を反映した実行的/概念的枠組を開発すべきである。
5. 我々は特に子どもたちの教育を拡大するため、「住民の参加」を強調すべきである。

各湖沼の担当者たちが自発的にケニア・チームとしての戦略計画を策定し、国策へ提案していくことを決めたことは、今回のシンポジウムの大きな成果でした。



ILEC 設立 30 周年記念特別企画展示

みずうみ い

湖と生きる

2017
3/4 ±
4/9 日

【開館時間】9:30～17:00
(入館は16:30まで)

【場所】琵琶湖博物館 企画展示室

【観覧料】観覧無料 * 常設展示は別途観覧券が必要になります。

【主催】公益財団法人国際湖沼環境委員会

【共催】滋賀県立琵琶湖博物館
休館日: 3/6(月)、3/13(月)

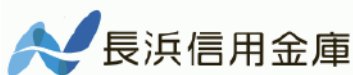
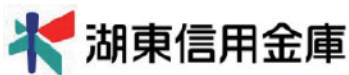
— 琵琶湖から世界へ 未来へ! —

後援: びわ湖放送株式会社、独立行政法人国際協力機構関西国際センター(JICA関西)

ILEC since 1986
財団設立 30 周年

ご寄付・ご協力ありがとうございます!

- 2016年に寄付のご協力をいただいております企業・団体様のご紹介 (順不同)



- 2016年に賛助会員(法人)として会費をいただきました企業・団体様のご紹介 (一口 3万円:二口以上の会員様のみ) (順不同)



財団の活動へのご理解とご支援を賜りたく、ILECは寄付のご協力および賛助会員へのご入会をお願いしております。寄付金、賛助会費には税制上の優遇措置が適用されます。詳しくは www.ilec.or.jp/jp/advertise をご覧ください。また、オンラインでの寄付ができるようになりました。

INTERNATIONAL LAKE ENVIRONMENT COMMITTEE FOUNDATION (ILEC)



〒525-0001 滋賀県草津市下物町1091 公益財団法人 国際湖沼環境委員会
— 事務局 — Tel: 077-568-4567 / Fax: 077-568-4568 / E-mail: infoilec@ilec.or.jp
Website: www.ilec.or.jp / Facebook: www.facebook.com/ilec.japanese

*本ニュースレター最新号、バックナンバーは上記の当財団ホームページでもご覧になれます。